

キックオフ大会 in高知 講演・自主シンポ・ポスター発表要旨

講演・自主シンポ

氏名	是永かな子(高知大学)
タイトル	なぜ今「ギフテッド」・2E学会なのか
要旨	私自身がギフテッドの特別な教育的ニーズについて知ったのは、2010年のデンマーク・オーデンセ基礎自治体での調査であった。ギフテッドの子どもの支援のためのギフテッドプログラムについて聞いて初めて、高IQゆえの困難さがあることを認識した。その後修士課程の院生がギフテッドについての研究をすることになり、日本のギフテッド当事者にも話を聞く機会があった。ギフテッドの視点で学校現場をみると、高IQゆえに困難性を示したり、不適応状態を示す子どもが見えてきた。このように高IQとしてのギフテッドの子どもは存在しているが、まずは支援者がそのことに気が付かなければ、支援にはつながらない。またギフテッドの子どものための分離した特別な場を作ることは日本において適切で現実的であるとは思えない。ゆえにギフテッドの存在にまず「気づく」こと、そしてギフテッドのニーズにも対応できる学校を、当事者、保護者、関係者で「ともに」作っていくことが重要だと考えている。日本において「ギフテッド」の定義は明確ではないものの、その解釈に関する議論自体を行うことと、諸外国との交流の際の翻訳を考えて、あえて「ギフテッド」の表現を用いることとしたい。
氏名	室橋春光(北海道大学名誉教授)
タイトル	ギフティッドをめぐって —北海道大学特殊教育研究グループの萌芽的取組—
要旨	我々は、学びの困難を有しつつ通常学級に在籍する子どもたちを主たる対象として土曜教室活動を実践してきた。その中には知的機能に高い面を有する子どもも参加しており、彼らの認知特性を検討する中で、我々はいわゆる「ギフティッド」に関心をもつことになった。WISC-IVの諸指標等による分析のみならず、overexcitability等の心理的諸特性についても分析を進めている。「ギフテッド」概念は広く、諸々の特性を含んでおり、生物学的視点から文化・社会的視点まで、多面的な検討が必要であろう。本学会では、自然科学、人文科学、社会科学を包摂する俯瞰的な立ち位置から、今後のありかたを見据えていくことが望まれる。
氏名	小泉雅彦(ギフトミンタラ)
タイトル	高い知的機能と生きにくさを抱えるギフテッドの援助実践
要旨	1998年土曜教室で最初のギフテッドと想定されるケースに出会った。対象児は高知能を持ちながらも学習面や生活面に困難を抱えていた。包括的な援助を試みたが画期的な成果が得られなかった。2013年には、支援級において常に不全感を抱えている知的ギフテッドの援助実践に関わり、小論としてまとめることができた。 それ以降「高い知能を持ちながら生きにくさを抱える子ども(ギフテッド)」を対象とし相談やアクティビティに取り組んできた。その成果を踏まえ、2019年には援助実践のパイロット的取り組みとして「ギフテッドの寺子屋」を立ち上げた。 本講演では、四半世紀の臨床研究を振り返りながら、子どもたちが求めている援助について考えを巡らしたい。

氏名	高山恵子(NPOえじそんくらぶ・昭和大学薬学部)
タイトル	2Eの明るい未来に向けて今、私たちができること ～当事者、保護者、支援者の自己実現～
要旨	NPOえじそんくらぶは設立から25年を迎えました。その中で数々の才能にあふれる発達障害のある人たちと出会っています。学校では障害だけに焦点が当たり、才能の部分は埋もれていることが多いです。逆に才能が先に見つかり、発達障害が中学生・高校生以降にわかることもあります。能力は高いけれども自立が難しい、という保護者の悩みも多く聞かれます。当日は自立に焦点を当て、能力を最大限発揮する条件を探るヒントをご紹介します。発達障害の問題行動といわれている言動は多くは、神経伝達物質が関係しています。そのメカニズムは、発達障害のないギフテッドの方々の、浮きこぼれのストレスによるメンタルの悪化と同じ場合もあります。神経伝達の観点からも自己理解・他者理解を深め、自己実現につなげるご提案をいたします。
氏名	中村順子(富山県立志貴野高等学校) 出口寛英(支援者) 大西なおみ(当事者・保護者)
タイトル	富山発！ ギフテッド教育の輪を上げたい！
要旨	本シンポジウムの目的は、演者もフロアも関係なく全員で意見交換ができる場の創出です。 演者1) 出口寛英: 小学校教頭を早期退職後、富山大学大学院進学。米国への交換留学の際にギフテッド教育を専攻する等の豊富な経験及びカウンセリング実績を有する識者。 演者2) 大西なおみ: 富山市内で生まれ育ち大学進学を機に県外脱出、博士号取得後は癌・感染症研究に従事するも、ニューロダイバーシティな長男の育児に直面し、研究対象を息子に移した研究者。 司会の中村は、約15年前に大学院でギフテッド教育を専攻して以来、その可能性を見つめ続けて来ました。3人の出会いから始まるケミストリーに、是非ご参加下さい！
氏名	石田祥代(千葉大学) 中道圭人(千葉大学) 伊藤駿(京都教育大学) 佐藤駿一(東京大学)
タイトル	ギフテッドからの学校改革に関する提言ー当事者の視点もふまえてー
要旨	ギフテッド・2E学会では、当事者の意見から知見を得て、新たな研究の課題を分析することも大切にしたい。同時に、当事者からの発信を通して、社会的関心の高まりや社会的啓発につながることも期待できる。本シンポジウムでは、ギフテッド特性があり学校に馴染みづらい子どもとその保護者に寄り添うプロジェクトを立ち上げ、実践しているプロジェクトメンバーと当事者、当事者を支える親や関係者が対面とオンラインで話し合う場を提供することを目的とする。当事者から得られた調査結果を振り返り、当事者の考えや意見を出してもらい討論を行う。また、ギフテッド傾向のある児童生徒のための合理的配慮パンフレット(案)の作成を試みる。

氏名	片桐正敏(北海道教育大学旭川校) 日高茂暢(佐賀大学) 富永大悟(山梨学院大学)
タイトル	過度激動の事例から学校、家庭での対応、支援を考える
要旨	本ラウンドテーブルでは、ギフテッド・2Eの子どもにみられる過度激動について扱います。過度激動はギフテッドの子どもに限らず認められる特性ですが、特にギフテッドの子どもでよく見られる特性として知られています。この過度激動のために、学校や子育ての場面でしばしば対応に苦慮する場面もあります。3名の話者提供から過度激動の特性と典型的な事例(架空事例)を示した上で、参加者の皆様と対応や支援を考える機会としたいと考えています。本ラウンドテーブルは少人数の対話形式で行ないます。もちろん、聴講だけでも構いませんが、参加者同士の積極的な議論を通して過度激動への対応や支援を共に考えましょう。
氏名	福井逸子・橘穂乃実(神戸親和大学)
タイトル	保育現場におけるギフテッドの現状と今後の課題について
要旨	近年、保育現場では、発達の特徴が様々に異なる子ども達が顕在化しています。その中で、ギフテッドについてはほとんど周知されておらず、保育集団の中に埋もれているのが現状です。現在、保育現場で用いられている教育・保育のガイドラインでは、子ども一人一人の発達の課題に即した指導を行うことの重要性が強調されています。それ故、保育者は、ギフテッドのように集団の中でのマイノリティな子ども達への存在にも目を向け、その子自身が過ごしやすい環境を導き出すための手立てを講じなくてははいけません。本ラウンドテーブルでは、ギフテッド応援隊の活動に参加している学生を交えながら、今後の保育現場におけるギフテッドへの関わりについて討議したいと思います。

ポスター発表

氏名	相楽典子(平安女学院大学)
タイトル	ギフテッド傾向のある児童の小学校入学後の躓きについて —事例から—
要旨	ギフテッド傾向児が小学校入学後、比較的早い段階で、学校に失望し、不適応を起こすことはよく知られていることである。ギフテッド傾向のある児童の小学校入学後の躓きについて一事例から分析する。出された課題への意欲喪失は学習への苦手意識となること、認知の偏りにより生じるミスから自己肯定感が下がること、また想像力による不安の増大など、困難を抱えていることがわかった。さらに、自宅では頻繁に表出される激しい感情も、学校生活の中ではコントロールしており、担任の先生を始め周囲に、抱えている困難さに気付かれない。少しでも早い段階からのサポート体制が望まれる。
氏名	加賀浩嗣(ギフテッド応援隊)
タイトル	ギフテッドの過興奮性と非同期発達を理解するための 神経科学的アプローチ Gifted neo-neoteny hypothesis
要旨	【目的】神経科学的な視点から、ギフテッドの過興奮性と非同期発達を説明できる理論を構築する。 【方法】神経科学を中心に、様々な分野の研究論文を参照して分析を行った。 【結果】過興奮性は青斑核ノルアドレナリンシステムの過覚醒として説明でき、非同期発達は前頭前皮質のネオテニーを中心とした脳の発達の異時性として説明できる結果が導かれた。⇒ Gifted neo※-neoteny hypothesis (※neo=noradrenaline evokes overexcitability) 【考察】ギフテッドを支援する上で、知能の早熟性だけでなく、高次脳領域のネオテニーにも着目した長期的な展望が求められる。

氏名	泉真紀(こどもと親を支援する会)
タイトル	
要旨	<p>1・目的 2E児童の場合、親も教師にもわかりづらく発達特性だけ着目され、もギフト特性には気が付かれず、内向的な性格ならば迷惑をかけないゆえに、学校生活では埋もれ放置され才能は見過ごされがちである。これに陥ると親は思いのほか悩み、最悪の場合、鬱リスクや夫婦関係崩壊のリスクもあり得る。LDのある2Eを事例に、ギフト部分特性の気づきポイント例を挙げ、本人が崩れないための健やかな成長を目的とした。</p> <p>2・方法—調査機関—調査場所 2000年4月～2024年11月 ある保護者につき出生から現在に至るまでの、子供の 24年間に渡る長期追跡調査を行った。</p> <p>3・研究対象 24歳男性 LD書字障害(18歳時期診断済み) ギフティッド部分(18歳時期米国心理士にギフト部分も示唆される) 当時の検査 KABC-II WAIS IV 全検査IQ135 小2 LD書字の傾向があり母が気にかける。 小3 都道府県発達医療センターにて検査。「LDはない、むしろ程度の弱いADDとASDの混合タイプ、個性の範囲内で療育の必要性は無し」と診断を受ける。 当時の検査 WISC-III 全IQ115 小6 オプトメトリストの医療従事者から、ギフト部分を示唆される。 当時の検査 WISC IV 全IQ130</p> <p>4・手続き 子供の発達特性の気づきポイントだけでなく、ギフト概念に基づくギフトポイント成長過程におき都度挙げてもらった。</p> <p>5・結果 自己肯定感が上昇することはなかったが、常に平坦な精神状態である。いち早く医療に結び付けたサポートの良さや、知能検査の理解、学校の教師以外での味方の大人の多さにより、学校以外での居場所つくりにより、ひきこもり、自傷行為等に陥ることは回避ができた。</p> <p>6・考察 24歳でテスト受検し「ジャパンメンサ」の会員になったことで、「LD書字はあるが、自分は思うほどバカではなかったのか ...！」と遅まきながら自身の脳の仕組みを自覚した。 成長過程におけるいわゆる「非同期発達」とは、実際に親が経験しないとその時に理解できることは少ない。後になり「このことだったのか ...」と理解ができる。 ようするに子供時代は大人びてるわりに、定型発達児ごく普通に成長する心の成長があまりにも遅いのである。それゆえに自己肯定感の低さや集団生活が難しく、24歳の今もなお人間関係構築(コミュニケーション)が苦手である。 ギフトが混在しているならば、心の成長が遅いことを親は覚悟し、22歳で社会人デビューを良しとせず、浪人や中退、受けなおし受検等、卒業後でさえも遠回りを経てようやく社会人として本格的デビューする子供が多いのではないだろうか。それまでに遠い道のりを、親は宿命と覚悟する必要があるのではないだろうか。</p>